

あの瞬間・・・

H・K 建設業（四十歳）

今も寝ている時に想い出す8月のあの日・・・

その日は、前日隣家で花火を見

ながらお酒を飲み盛り上り、自宅に帰ってきてインターネットを

しながら朝方までずっと飲み続け、気付けば焼酎1・8リットルのボ

トルが1人だけでなくなるほど飲んでいました。その日の昼頃、暑

さで目覚め、あまりの天気の良いに、いつもの休み同様に家の近く

の海に行きました。しかし、期待するような波が全然なく、いつも

ならあきらめて家に帰るのに、その日は何故かどうしても波乗りを

したくて、海岸線を北上していききました。そして、やっと波のある

場所に着き、2時間くらい波乗りをして、その帰りに水を買おうと

コンビニに入ったのですが、「厚いし慣れた帰り道だから」という自

分の気の緩みからビールを買い、車に戻ってしまいました。ビール

を一口飲み、再び帰路を走り始め、音楽でも聴こうと携帯をいじって

いた時、突然「ドン」と鈍い音がし、フロントガラスの上に人が上がっていました。

自分は何があつたのかまったく分からず、夢でも見ているのかと思

い顔を数回叩いたり、わけもなく叫んでみたりしましたが、すぐ

に現実である事を認め、倒れている人の側に行きました。血だらけ

の人を見たとき血の気が引いて、体が動かなくなりました。

被害者の方の周りには数人の近所の方が集まっています、自分に「こ

の人は、前の家の方だからご主人を呼んできて」と言われ、我に返

り、すぐご主人を呼びにいき、自分が犯してしまったことをただひたすら謝っていました。

その後、救急車が来るまでの間、家族の皆さんが被害者の方に声を

掛けているのに自分は、「早く救急車がきて、命が助かって欲しい」と

いう身勝手な思いで見ていることしかできませんでした。救急車

が到着し、被害者の方が病院に行

かれた後、現場検証が始まりました。その時、自分は、「何故携帯をいじってしまったんだろう」と警察官と話をしながら考えていました。その後、コンビニで買ったビールを思い出し、車にビールはま

ずいと思い、隙を見て車から出していました。

そして、検証が終わったと同時にぐらいに病院から連絡が入り、警察官から被害者が亡くなったことを伝えられました。自分の体中の

力が抜けて、立っていることができずにその場に座ってしまおうと、

パトカーで書類を作るのと言われ、連れていかれると警察官から、

「酒の臭いするね」と言われ、検査すると0・15mgの反応が出て

酒気帯びでも逮捕されました。取調べが始まるまでの時間、「自分が

こんなことを起こす訳がないから、これは夢だ、目を閉じて再び開け

れば、いつもの布団の上にいる」と思い願っていました。取調べが

始まり、事故の原因が一方的に自分にあることを改めて知り、すべ

て正直に話をしないと亡くなった方に申し訳ないと思い、ビールを

草むらに置いてあることをすぐに

言い、前日の朝までお酒を飲んで

いた事も正直に話すと、お酒がどれくらい経たないと抜けないかを

一から説明を受けました。正直お酒は寝たり、運動したり、飲んで

すぐだったら車の運転に影響なく大丈夫だと思ひ込んでいた自分に

は衝撃的な事実でした。裁判が始まると自分の犯してしまったこと

の現実を知ることになりました。裁判所に行くと、被害者の家族と

知人の方々が一杯になっていました。

その中に母と叔父2人が居ました。その時、母に証言台に立って

貰うことをお願いしたことをとても後悔しました。事故を起こして

しまった時点で、もの凄く辛い思いをさせてしまっているのに、被

害者の方の身内の中、自分の弁護をしてもらうなんて、申し訳なく

て母を見ることができませんでした。被害者のご主人が証言台で、

被害者の方のこれまでの人生を語られていた時は、この身を裂かれる

思いで聴いていました。最後に「ご主人が「極刑をお願いします」と述べられました。改めてご主

人とご家族の無念と怒りを感じ、

自分の存在を無くしてしまいたくありません。

そんな中、知人、友人から「し

っかり償い、戻ってこい、待つてるから」と言う言葉を頂き、被害

者ご遺族の言葉と刑期を受け止め前を向く決意をしました。

ここ市原刑務所に来ていろいろな方の話を聞いたりして、自分の

考え方を全部リセットしてやり直すことにしました。そうしなければ

ばただ前を向いているだけで、何も進みはしないと気付くことが出

来たからです。被害者のご家族の皆様

に謝罪し、自分の経験したことを多くの人に知ってもらい、交通事故で悲しい思いをする人が無

くなるように努力していきます。

「贖いの日々」

第48集（平成25年版）より抜粋

転載・二次使用を禁止します。